

## Ⅱ

# プロジェクト型総合学習の実現に向けて

上 野 澄 子

### 1 はじめに

福井大学とのかかわりが深い長野県伊那市伊那小学校を訪問する機会を得た。好天に恵まれた日、到着直後に校舎の周りを一周すると、校地の至る所で生き物が飼われていた。「動植物自然愛護」に重点を置いているものと考えたが、それは全くの見当違いであった。

この日に参観した授業は、3年生の総合活動。いわゆる「総合的な学習の時間」である。

「ともがき広場」と名付けられた授業会場へ向かうと、驚いたことに、そこには3頭の羊が飼われていた。このような授業に出会ったのは初めてで、これから始まることへの大きな期待がふくらんだ。

授業の詳細は後述するが、子どもたちが入学以来育ててきた羊とのかかわりの中で、教科書では到底学べない数多くのものを、体験を通して身に付けていく様子をはっきりと見る事ができた。羊を飼うというプロジェクトを通して、子どもたちは実に多くの力を身に付けながら、確実に育っている。

伊那小学校では「内から育つ」というテーマを長年貫いてきているそうだが、その精神が理想にとどまるのではなく、事実としてしっかり根付いていることが分かり、教育の原点を見る思いがした。私学ならこのような教育があって不思議はないが、公立の小学校での取組であるだけに、ただただ感動した。

しかし、このようなプロジェクト型総合学習を公立の学校で実現するには、とても高いハードルがある。伊那小学校で大切に受け継がれてきた伝統が、一朝一夕に作られたものでないのと同時に、公立学校の研究体制をそう簡単に変えることはできない。日々授業や生徒指導、部

活動などに追われる教員に対し、徹底した意識改革を促し、新しい研究組織を作り上げていくには困難を極めることが多いからだ。

綿密な計画や学年横並びが当たり前とされる学校で、出る杭のように1学級の1教員が独自の研究実践をするのではなく、地域や学校の組織の中で温かな理解を得ながら、子どもたちと共に伸び伸びと夢を実現していくような教育ができればと願っている。来年度設置が予定されている教職大学院において、どのような協働研究をすべきか模索してみた。



## 2 総合的な学習との出会いの中で

福井大学に赴任する以前は、公立の小、中学校教諭や福井県教育研究所研究員を歴任してきた。そこでの総合的な学習の実践や県内外の取組例をいくつか紹介する。

### (1) 過去の実践を振り返って

#### ①エイズ教育

はじめて「総合的な学習」を手懸けたのは、平成8年ごろであった。当時勤務していた福井市順化小学校は、同じ地域にある中学校、高等学校とともにエイズ教育（性教育）の文部省指定を受けていた。福井市の中心部に位置し、絶えず時代を先取りした研究校として名高く、年間を通じ学校参観者も多かった。

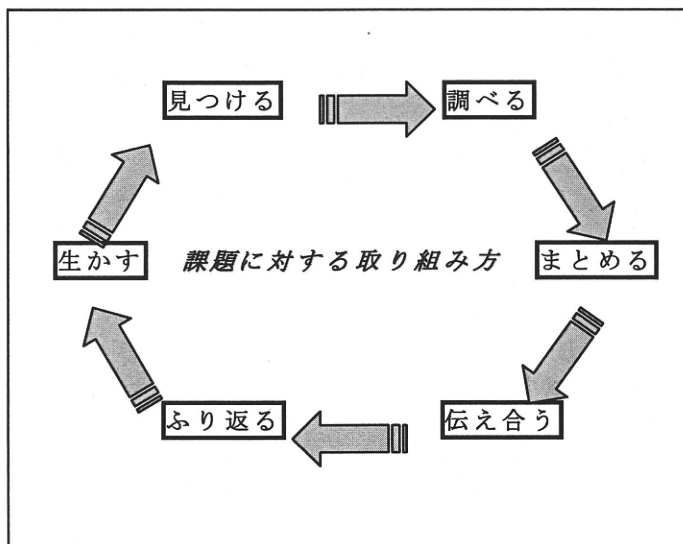
性教育をどのように進めるかと考えれば、たいていは学級活動や体育の保健領域での学習に落ち着くが、そのころ話題となった「総合的な学習」に挑戦しようという気運が盛り上がり、新たな学習スタイルに取り組むこととなった。「探検活動」という名称で異学年集団による調査活動を展開したり、ブースを作ったの体験コーナー、保護者を交えてのパネルディスカッションを行ったりし、内容は斬新なものばかりであった。

4年生48名で実施した「みんななれるんだよ！スポーツヒーローの体に」の単位では、エイズを学習する前段階として、健康な体作りをめざして取り組んだ。子どもたちが提案した課題に沿ってグループを作り、「調べ学習」を進めていった。インターネットではまだ十分検索できず、本や図鑑から得る知識がほとんどであったが、保護者で栄養士の方や学校医の先生に協力していただくこともできた。子どもたちから松井秀喜選手やJリーグの小野伸二選手の少年時代について知りたいという要望があり、担任が松井選手の両親を訪ねたり、小野選手の出身校の養護の先生にお話を伺ったりすることもあった。

研究発表会では、食べ物、運動、睡眠、病気（エイズを含む）、体の成長など10グループがポスターセッションで表現活動を行った。一人一人に活躍の場があり、それぞれの目標に向かって子どもたちは大変意欲的に活動した。

## ②かがやき学習

平成13年、現行学習指導要領実施の前年に赴任した福井市和田小学校では、「かがやき学習」の呼び名で「総合的な学習の時間」について既に深い研究がなされていた。研究組織の中に総合的な学習部会が設置されており、プログラム型の総合学習全体計画もほぼ完成していた。地域には老人福祉施設があり、交流を通して児童の思いやりの心を育てようという実践が年いていた。この経緯から、学校全体の総合学習の柱は「福祉」であった。



単元構想案は、その年度で完結する構成とした。3年生の子どもたちが地域のお年寄りとおふれ合うという題材で素案を作り「ようこそ！ぼくらの大先ばい」というテーマで実践を行った。左図のように課題の発見、追究、表現、活用のサイクルに視点を当て、子どもの思いや願いを子どもなりに探り、実現していく過程を評価した。

活動は地域に住むお年寄りを宝と考へ、「大先ばい」と称していろいろ

な知恵を学び、交流を深めるという内容だった。地域には由緒ある神社仏閣や昔のからの言い伝えがあり、それらを調べたり、祖父母からの聞き取り活動を行った。また、社会科や理科とつなぎ、栽培活動を続けたり農作業、収穫祭を体験したりする内容だった。

これらの学年での取組に加え、国語、音楽、図画工作、道徳などとの関連を図った。地域のお年寄りから戦災・震災の体験談を聞くことで、自分たちの住む地域の被害を初めて知る子どももいた。戦災を題材とした国語の「ちいちゃんのかげおくり」をこの時期に学習し、音楽ではオペレッタ「ちいちゃんのかげおくり」を仕上げた。子どもたちはオペレッタに熱心に取り組み、地域のお年寄り、祖父母、保護者、2年生にそれぞれ公開した。

2年生には、1年間取り組んできた「かがやき学習」のまとめとして発表した。年齢が近いことは、子どもたちにとって緊張感が高まるようだ。教科学習部では、「聞く・話す・伝え合う」ことに重点を置いて研究を進めており、相手に分かりやすく伝えるための表現方法についても取り組む機会となった。活動構想図は、次のとおりである。

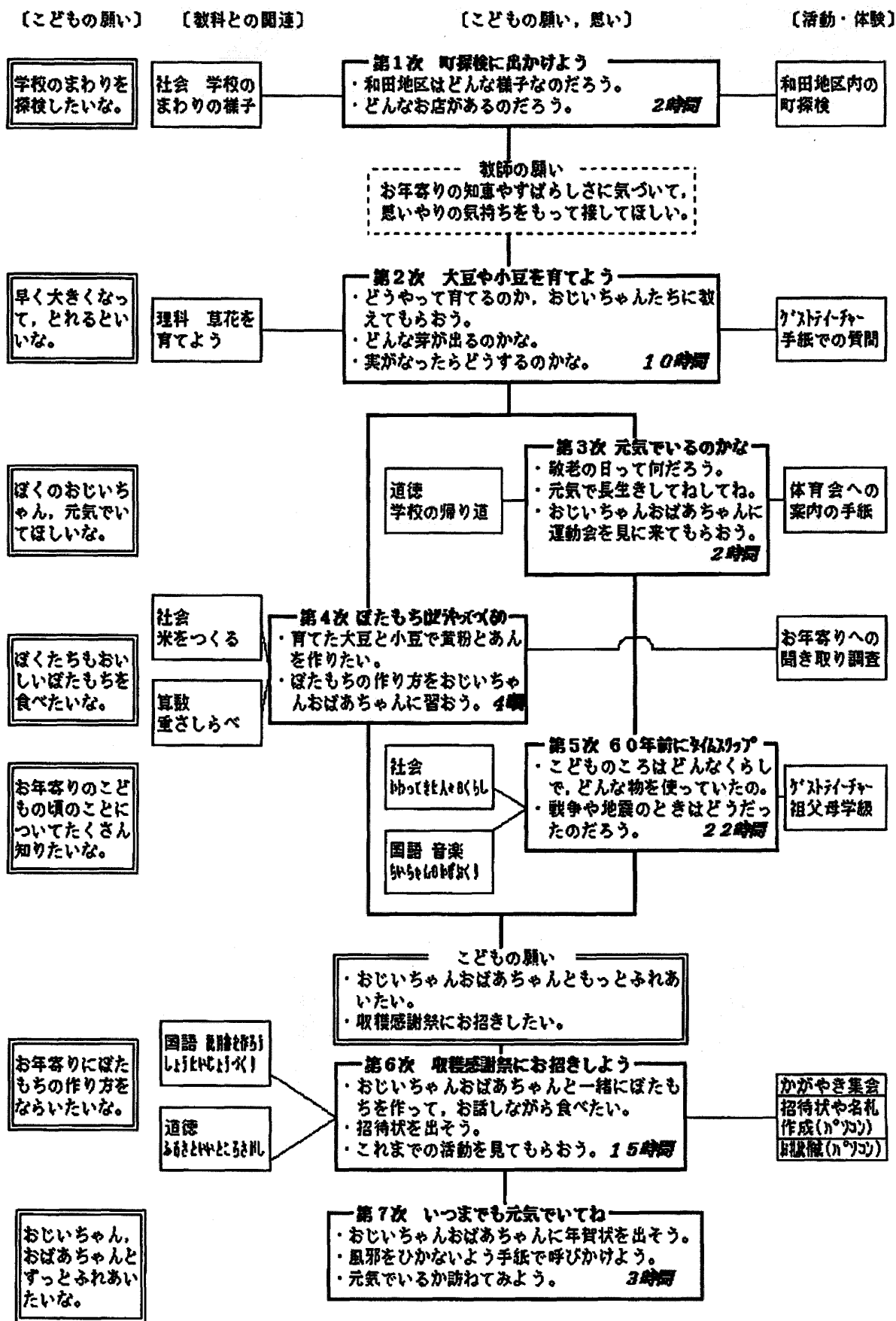
オペレッタ

「ちいちゃんのかげおくり」を披露する児童



### 3年生 ようこそ！ぼくらの大先ばい活動構想図

(58時間配当)



## (2) 福井県の総合学習

### ① 福井大学附属中学校音楽科の歩み

福井市中学校連合音楽会で各学校の演奏を鑑賞していると、毎年のことながら附属中学校の発表は異彩を放っていた。聴き覚えのない曲やせりふ、一番後ろの席まで届く響きのある声に、会場で聴く中学生はしばらく混乱する。「何が起きているんだろう…」と。創作音楽劇とは何であるかが徐々に分かり始め、終わるとため息が聞こえた。

連合音楽会で発表する前年に、そのテーマとなる舞台を修学旅行の目的地として選び、現地で音楽劇を披露している。すべてを生徒の手で創作するという壮大な計画であるが、委員会や部活動、そして「探究するコミュニティの創造」の研究テーマのもと、各教科に支えられていることが容易に想像できる。十数年もの間研究を積み重ねてきたものであるので、詳細を省き全体像を述べたい。

オペレッタづくりからスタートしたこの実践は、授業時数の少なくなった音楽科を全教科の中心として総合的に位置付け、中学校3年間に経験する様々な行事でスパイラルを構成しているのが大きな特徴である。音楽集会、合唱祭、修学旅行、連合音楽会などのモチーフを「主題－探究－表現」のプロジェクト学習とし、次へとつなぐ方式を採っている。全校での活動に組み入れられているため、下学年の生徒は次の目標として上級生を見つめ、さらに乗り越えようと努力する。それによって、生徒一人一人の成長だけでなく、その学年全体が一回り大きなうねりとなって進化していく。

### ② I P T 活動（福井県立金津高等学校）

福井県立金津高等学校は、総合的な学習において大きな成果を上げている、特色ある高等学校である。平成9年度から、I P T活動というユニークな取組を続けている。

I P TとはIntellectual Power Trainingの略で、「知力を錬磨し、高度に知的な問題にも対応する能力を育てる学習」のことを指している。これはますます国際化し、複雑化している社会の中でも積極的に活動でき、また社会へ貢献する力を持った人物の育成をめざす活動でもある。週に1時間実施し、生徒の興味・関心に応じた、多様で独自の活動を行っている。

生徒たちは与えられた課題をまじめにこなす素直さはもっているものの、積極性に乏しく、人前で話すことが不得手で、自分の考えを論理的に表現する力が不足していたことが、この取組のきっかけとなった。また、知識注入型の受験教育では限界が見えたことも大きな理由となっている。「主体的に生き、高校卒業後も通用する本物の力を持った人間を育てる」という高い理念のもとに、ますます進化を遂げている。

この活動で育成しようとする力は、次の4点である。（活動内容は平成18年度）

まず、情報を収集・活用しながら、物事を論理的に考えたり、表現したりする力で、具体的な活動内容として、小論文や壁新聞、プレゼンテーションなどが挙げられる。次に、他者の生き方や価値観を認め、よりよい人間関係や社会を築く力で、具体的にはパネルディベートや時事・人権問題への取組、講演会の開催など。3点目として、芸術・文化に対する豊かな感受性と創造力で、内容は芸術鑑賞や金津創作の森でのクラフトセミナーを実施している。最後に、

進路を自ら探求する中で、課題を発見し、解決する力あり、職業研究、進路探求、課題研究などの活動である。課題研究の最終発表会には、福井大学をはじめとする連携機関から参観者が訪れている。

これらの活動を通して、社会のあり方や自らの生き方を考えさせ、進路選択に役立つ力や、将来にわたって活用できる実のある能力の育成をめざしている。卒業生からは、「レポートを作成したり、自分の考えをまとめて意見として発表したりする力がついた」、「生きる力の基礎作りとなった」というメッセージが届けられており、成果が伺える。

### ③研究会や研修講座において

県内では教育関係の各機関において、総合的な学習の研究会や研修講座が開かれている。ここ数年は「指導と評価」、「情報」、「国際理解」、「環境・エネルギー」、「健康・福祉」、「食育」など、今日的課題をテーマに実践されている。参加者の多くは、所属する学校の総合的な学習の推進に問題意識を持っていると感じられた。特に中学校、高等学校においては、教科担任制であることや受験への準備などから、各学年の総合的な学習への取組が十分深まらないことが、大きな障害のようだ。

平成15年12月の学習指導要領の一部改正により、各学校では総合的な学習の全体計画を細部にわたって作成している。ある研修会でその案を持ち寄ったところ、地域の特性が見られたが、半面、内容に偏りがあったり、年間すべての計画が1時間ごとに綿密に作成されていたりと、改善すべき点も多かった。学力向上の命題を抱え、総合的な学習の計画や内容について十分話し合う時間は見つからないのかもしれない。

### (3)長野県伊那市伊那小学校を訪問して

冒頭の伊那小学校の研究についてについて、もう少し詳しく述べたい。

20年ほど前に、「長野には、羊を飼うことで教育をすべて完結させている学校がある。」という話を同僚の教員から聞いたことがある。それが伊那小学校だったことが、この日に分かり、受け継がれてきたすばらしい理念と実践を、実際に参観することができて本当に感激した。中心に据えるものは「材」と呼ばれていた。3年生の研究授業では羊が「材」となっていたが、校舎の内外にはアイガモやウサギなど様々な生き物が「材」として育てられていた。



#### ①All in one

題材名は「さくらに元気な赤ちゃんを産んでもらおう」、本時のめあてを一言で表せば、「子羊の体重測定」であった。朝から「フスマ」という飼料を運んできたり、おりの中に入ったりと、子どもたちの羊に寄せる思いの大きさは相当なものであった。

測り方は、初めに当番の子が自分の体重を測り、次に子羊を抱いて測ってから引き算で

求めるという方法だった。子どもたちに尋ねたところ、このやり方はみんなで話し合って決めたそうだ。全紙大のグラフ用紙上に、生まれてから何回か測った体重が折れ線グラフで結ばれていた。体重の変化を知りたいという子どもたちの願いによって、小数の足し算や引き算、数値をグラフに表す力が付いていくことは容易に分かる。

子羊の体重を測るには、さくらから引き離さなくてはならない。力のある男子がこの大変な場面で活躍していた。子羊を捕られまいとする、さくらの必死な姿を何度も見ることで、子どもたちは母羊の愛情を自然に感じ取っているようだ。体重を測るしばらくの間、今度は別の男子がさくらに餌をやってなだめていた。子どもたちを信頼しているからか、さくらは以前ほど暴れずに餌を食べるようになったという。羊の世話をしたくても、やはり怖いという思いがある子は、おりの近くを掃除したり、餌となる草を集めたりして、自分の責任を果たそうとしていた。

「さくらに元気な赤ちゃんを産んでもらおう」と考えたことで、性教育がスタートした。3年生までの子どもは、生まれてくる立場で自分を見つめることができるという。カブトムシの交尾から、オス羊と交配する必要があることを理解したようだ。

このように羊を育てることから、子どもたちは実に多くのことを学んでいた。この授業を通して、一つのものにすべてを包み込むプロジェクト型学習のすばらしさを体感することができた。

## ②待つ姿勢

生まれて18日目の子羊は、体重が10kgを超えていた。体重は子どもたちが交代で測っており、当日は2人の男子が当番となった。1人目の男子がうまく子羊を抱きかかえて体重を測った。

ドラマはこの後に起こった。測り間違いや誤差を気にしてか、子どもたちは2回測ることにこだわっていた。2人目に測るりょうた君は、小柄な体でどうしても子羊を抱えきれない。さくらの様子を気にかけながら周りで応援する友達に励まされ、何度も挑戦したが結局測定できなかった。日に日に成長する子羊の様子を考えて、「この次はもう無理やぞ。」と心配する声も聞かれた。

ここまで、担任の田畑教諭はじっと子どもたちを見守っていたが、りょうた君が断念した様子を見て、「りょうた君から、みんなに一言あります。」と伝え、彼への理解を促した。残念な思いをしていたはずなのに、みんなが温かい気持ちで納得してくれたからか、りょうた君には笑顔が戻っていた。子どもたち一人一人の心の交流が学級の中にあふれ、胸の熱くなるシーンであった。

この授業を通して、決して教え込むことなく子どもを信じて待ち、子どもたちの中に自然に培われていく学びの姿を見ることができた。「内から育つ」という研究テーマが具現化されていることを実感した。

### ③支えられ、受け継がれる研究

「なぜ、こんな教育ができるのだろう。」と心からうらやましく思うとともに、不思議さも感じる。子どもたちは、羊を育てるというプロジェクトのもとで、着実に育っている。研究の進め方として、総合学習・総合活動を中心に、そこで身に付けた力をカリキュラムとしてなぞっていくという。30年もの間、このような研究が受け継がれている理由は、伊那小学校の同僚性や期待に応えようとする責務、自負心によるものだそうである。



市の中心部に近い小高い丘の上に位置するこの学校は、地域に支えられ、保護者の理解や協力を大きな推進力にしているようにも感じる。また、それ以外の何かがあるのでは、とも考える。平成20年2月に全国に向けて公開される学習指導研究会で、その答えを見出したい。

## 3 プロジェクト型総合学習

### (1)プロジェクト型学習

年間指導計画や評価基準に忠実に沿っていくプログラム学習は、目標や手段が明確で取り組みやすい。多くの教師がこの手法に慣れ親しんできた。一方、プロジェクト型学習は、子ども主導型の学習である。到達目標ははっきりしているが、どんな過程を経ていくのか見通しが持てないため、教師から敬遠されやすい。

しかし、プロジェクト型学習からは得られるものが大きい。学力ばかりでなく、子どもの自主性や主体性を育て、実社会で必要な力を育てることができる。すなわち、人や物や時間のマネジメントなどを経験しながら、問題解決に向けて情報収集能力や方法論を獲得していく。教師は、子どもたちの学ぶ姿を見て、自分自身の学びにもつなげることができる。予想した以上のものが得られるのも、プロジェクト型学習の魅力である。

### (2)PISA型の学力

PISAの結果がここ数年注目を集めている。日本の子どもの学力が、外国に比べて低下したと、大変問題視されているが、学力向上のための手段や情報が十分にある今、重要なのは子どもの意欲の導き方だと考える。

先に述べた伊那小学校の授業で、記録係の子はその日の羊の様子を見ながら、観察記録の文を熱心に書いていた。また、引き算をして増加した体重を求めたり、折れ線グラフをつないだりもしていた。ただ単に観察文を書くのではなく、数値の変化や羊の様子を自分の思いに結びつけて文章に表していたのである。



この一コマからも分かるように、「羊に赤ちゃんを産んでもらう」というプロジェクトによって、PISA型の学力を育てることができる。また、子どもたちの発意を大切に学習の場で取り込むことにより、子どもたちの意欲は大いにかき立てられ、あらゆる困難に対処しながら実現に向けて進んでいくと思われる。

### (3)総合的な学習をプロジェクト型に

公立学校でプロジェクト型総合学習を実践するには二つの課題がある。校内の研究体制の改革であり、もう一点は地域や保護者の理解を得ることである。

公立学校では、共通理解や協力体制という名のもと、学年間に大きな隔たりができないように調整し、どの学級も同じ内容で実践することが多い。学年や学級によってばらばらに活動すると、学校に対する信頼が失われかねず、保護者からは不安の声や担任批判が起こりやすいと考えるからである。そこで、各学年の年間指導計画を前年度内に完成させ、新学年からはそのプログラムに沿って学習内容を確実にこなしていく。このスタイルは、家庭や保護者に安心感を与え、理解を得やすいが、子どもの自主性を育て、興味・関心を引き出すという意味では難しい。

昨年、福井県教育研究所において担当した総合的な学習の研修講座で、文部科学省教科調査官の杉田洋先生に「総合的な学習の課題と展望」というテーマで講演していただいた。受講者が自校の総合的な学習の全体計画を持ち寄り、計画内容について紹介し合う場を作ってくだった。総合的な学習の主任の教員が大半であったが、中には説明に苦しむ者も見られた。各学校それぞれ特色や地域性があり、5、6人のグループでそれらの長所を生かして、共同の計画に仕立て直した。さらに、それを保護者に説明するための説明書を作成した。

この演習により、受講者は自分の学校の特長は何か、地域や保護者にどんなことを説明しなくてはならないかが明確になり、頭の中が整理されてとても有意義な研修となった。教員の意識を改革し、保護者や地域に対し説明責任を果たす努力をすることにより、プロジェクト型総合学習の実現のための理解が得られるのではないだろうか。

平成17年に文部科学省からの委嘱により行われた「総合的な学習の時間実施状況調査（総合的な学習の時間実施状況調査研究会 代表・矢野重典国立教育政策研究所長）」では、小学校教員の約60%が、中学校教員の約65%が全体計画や指導計画の工夫改善に課題があると回答している。総合的な学習の一層の充実のために、文部科学省は昨年度から新たな予算を計上している。総合的な学習の時間モデル事業や活性化プランをはじめ、各都道府県におけるコーディネーター養成講座の開催など、いくつかの内容が挙げられる。

各学校の総合的な学習の実践を今一度ふり返り、プロジェクト型総合学習を実現する機会になれば、と期待している。

#### 4 おわりに

じっくり腰を据えて総合的な学習に取り組みたいという思いは、どの教師にもあると思う。しかし、現実が伴わないのかもしれない。話し合う時間がない、受験で大変だ、部活動で多忙であるなどの現実が、総合的な学習への取組を遠ざけていると思われる。

発想の転換を図れば、プロジェクト型の総合学習は学力向上の近道となるのではないだろうか。一つのプロジェクトには、教科の1単元と異なり、多くの要素が含まれている。したがって、短時間で効率よく学力を向上させることができる考える。

来年度スタートする教職大学院において、プロジェクト型総合学習についての実践的な協働研究を行い、この論理を実現に結びつけたい。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省 「小学校学習指導要領（一部改訂）」2003年
- 2) 文部科学省 「OECD生徒の学習到達度調査」2005年
- 3) 文部科学省 「読解力向上プログラム」2005年
- 4) 福井市和田小学校 「実践の記録」2002年
- 5) 福井大学教育地域科学部附属中学校 「研究紀要 第35号 探求するコミュニティの創造」2007年
- 6) 福井県立金津高等学校 「IPT活動の記録」 2006年
- 7) 長野県伊那市立伊那小学校 「公開学習指導研究会 研究紀要 内から育つ」2007年
- 8) 稲垣忠彦・佐藤学 「授業研究入門」岩波書店 1996年
- 9) 山根耕平 「総合的な学習の研究」ナカニシヤ出版 2001年
- 10) 石川英志 「教師と子どもの可能性の探求と授業の世界」中部日本教育分科会 2002年